

スーダンの有用植物＜その 2＞

ソルガム

ソルガム (*Sorghum bicolor*) は、スーダンを代表する畑作物であり、トウジンビエとならんで、古くから主穀として栽培されてきた。アフリカ大陸でみると、16世紀の大航海時代ののち、新大陸起源のトウモロコシや北方の地中海起源の小麦など、後発の外来穀物の栽培が拡大し、それまで主流であったソルガムやトウジンビエといった伝統穀物から、徐々に新規作物に置き換えられてきた歴史がある。スーダンにおいても、近年、輸入小麦によるパン食が広がってきているものの、ソルガムやミレットは今日でも伝統的な主食として依然有力な存在であり、一定の生産規模を保持している。特に国土面積の 85%強ともいわれる天水農業が主流の非灌漑地区においては、文字どおりの主作物として、住民の生計を支えている。

これまでも AAINews において「ソルガムと天水農業」「集水型農業による牧畜民のソルガム栽培」「ソルガムとコムギの粒食文化」「ソルガム畑に被害をもたらすもの」と題し、ソルガムの歴史的・文化的な側面についてふれてきた。今回、スーダンの「有用植物」を紹介していく本シリーズの初回で改めてソルガムを登場させわけは、この作物の将来的な可能性と課題に焦点をあててみたいと考えたからである。

上述のとおり、ソルガムは天水依存の非灌漑地区で栽培されることから、粗放的に栽培されるイメージが強いが、実はナイル川近辺の灌漑地区においても夏の飼料作物としてよく栽培されている。ナイル川沿いの農家は、冬期（10～4月）の作物生産に、ヒツジ・ヤギ・ウシ等の家畜飼養を組み合わせる農牧複合経営であることから、家畜飼料の確保は重要な仕事である。灌漑地区のソルガムは、アブーサバイン（サバインはアラビア語で 70 日の意味）という早生品種が選択され、穂実・茎葉すべてが飼料として利用されている。また、通常、作物生産は冬期に集中し、暑さが著しい夏期（5～9月）は作物にとっての「死の季節（dead season）」と呼称され、栽培がさけられる

傾向にあるが、そのなかでも飼料用ソルガムは高収量で安定的に作付けできる貴重な夏作物として、栽培されてきた実績がある。

また、灌漑地区の夏期栽培は、近年、飼料用ソルガム以外にも、ゴマ、ラッカセイ、ヒマワリ、ダイズ、イネなど市場性の高い換金作物を積極的に導入する試みが行われているが、筆者は、これらに加えて、食料用ソルガムも新規換金作物としての可能性もあると考えている。これまで食料用ソルガムは、他の換金作物と比較すると、優位性が低いと考えられ、作付けは非灌漑地区での伝統的な粗放栽培と相場が決まっていた。ただスーダンの通貨安による経済情勢悪化や将来の気候変動による食糧事情を考えると、輸入依存性が高く供給が不安定で、かつ冬作栽培適地が限定的である小麦の代替作物として、主食となる夏作食料用ソルガムの見直しがあってもよいであろう。

加えて、冬期と比べ、夏期の灌漑地区の作付面積は圧倒的に少なく、空閑地が多いことから、土地の利用効率を高めていくという点でも、食用ソルガムの作付けは有効だと考えている。そのためには食用ソルガムの高度利用に向けた、近代的な製粉加工技術の導入、高付加価値化、流通網の改善など包括的な取り組みが求められる。スーダンの研究機関でも、小麦粉との混合利用による製パンの研究も開始されており、小麦の輸入代替として、現地でも着目されている。このように、スーダンの暑い夏に適応した作物としてソルガムの積極的な活用の可能性はもっと追究してもよいのではないかと考えている。



飼料用早生品種のソルガム「アブーサバイン」の夏栽培（左）と飼料用ソルガムの取引（右）